

# フンメルのトランペット協奏曲ホ長調にみる キートランペットの演奏表現

## Performance expression of the keyed trumpet in Hummel's Trumpet Concerto E-dur

赤 堀 裕之史

AKAHORI Yukinori

I have been playing many trumpet concertos using the modern valved trumpet. The works were composed in many periods from the Baroque through modern period. However, it is not until the late 19th century that the valved trumpet was developed. The works composed before the development of the valved trumpet could not have been performed by the valved one. So we cannot overlook the fact that the transitional trumpet other than the valved one was in use and the works before the late 19th century were composed for the transitional one. Performing the works using the trumpet used in those days is to reproduce the musical expression of the days quite different from the one performed by the valved trumpet, which is the expression pursued by the composers of those days. The studies on the old trumpet like the keyed one are not developed enough, though the performance with original instruments has recently come to be held little by little.

I have tried to shed a new light on the original expression by the keyed trumpet through the study of the difference of the performing method between the keyed trumpet and the valved one, using Hummel's concerto.

### 1. はじめに

かねてより筆者は、多くのトランペット協奏曲を現代のヴァルヴ式トランペットを用いて演奏してきた。それらが作曲された時代は、バロックから現代に至るまで多岐にわたっているが、現在我々が用いているヴァルヴ式トランペットは、19世紀終わり頃に開発されたものであり、それまでは用いられていなかった。それまでに過渡期のトランペットが存在していたこと、そして19世紀末までのトランペット作品は、これらの楽器のために書かれていたということは、見過ごしてはならない問題ではないだろうか。なぜなら、各時代の作品をその当時のトランペットで演奏することは、現代のヴァルヴ式トランペットと全く違う当時の表現を再現するものであると考えられるからだ。そしてそれは、作曲家が期待した表現でもあろう。しかし、こういった過去のトランペットについての研究は、近年オリジナルの楽器にこだわった演奏も少しずつ行われるようになってきたものの、まだまだ進んでいないと言える。

こうした過去のトランペットの中でも、18世紀の終わり頃アントン・ヴァイディンガー Anton Weidinger (1766-1852) によって発案されたキートランペットは、ハイドン Franz Joseph Haydn (1732-1809) やフンメル Johann Nepomuk Hummel (1778-1837) など著名な作曲家により協奏曲が書かれている、重要な楽器の一つである。しかしこれらの作品も、やはり現在はヴァルヴ式トランペットで演奏され、キートランペットは忘れ去られてしまっている。また、研究<sup>1</sup>もあまり行われておらず、キートランペットを用いた当時の演奏について論じているものはほとんどない。

現代では、アーバンのピストンコルネットのための教則本<sup>2</sup>が広く普及し、演奏法や表現のための演奏技術などが確立されている。さらに、ハイドンやフンメルの協奏曲は重要な作品として認識されており、ほぼすべてのトランペット奏者が演奏しなくてはならない課題である。しかし、その演奏法はキートランペットのものとは別物であると筆者は考える。

本稿は、題材にフンメルの協奏曲を用い、ヴァルヴ式トランペットとどのような演奏法の違いがあるかを研究することで、キートランペット独自の演奏表現を明らかにしようとしたものである。

## 2. キートランペット



(図1 : Keyed Trumpet(5key),Günter Hett 制作 2015 筆者所蔵)

### 2.1. 開発の経緯

この節は主に S.K.Klaus. *Trumpets and Other High Brass Vol.1,2* を参照している。

15世紀ごろから普及していたナチュラルトランペットは、決められた長さに作られた管に息を吹き込み、唇の振動を増幅して音を作っている楽器で、その構造上、自然倍音のみしか演奏できない。この自然倍音のみで演奏されていたバロック時代のトランペットは、現在のものより2倍の長さがあり1オクターブ低い位置に基音を持っているが、音階を演奏するために演奏者はクラリーノ奏法<sup>3</sup>を生み出し、その結果、繊細な唇のコントロールと強靱なスタミナが必要となった。しかし、

<sup>1</sup> 論文としては、M.J.Rouček 2012 *Chromaticism of brass musical instruments in the first half of the 19th century - instruments fitted with a key mechanism* PhD.diss. Přidělovaný akademickýのみしか探すことができなかった。この論文には、キートランペットを中心とした楽器の変遷と Rouček が集めた資料が記載されている。他にも、Dahlqvist,Reine. *The Keyed Trumpet and its greatest Virtuoso, Anton Weidinger* にこの楽器を発案し普及したヴァイディンガーのことが書かれている。

<sup>2</sup> アーバン Joseph Jean-Baptiste Laurent Arban (1825-1889) が、1864年に書いた教則本 *Grande méthode complete pour cor-net à pistons et de saxhorn*。ヴァルヴ式トランペットも同じ構造であるため、多くの教則本は、この本をもとに編纂されている。

<sup>3</sup> クラリーノ奏法とは、自然倍音の第8音から第16音を用いて音階を吹く奏法。高い倍音列を維持するためには、高度な技術が必要である。

様々な要因<sup>4</sup>により、ナチュラルトランペットの使用に陰りが生じた。

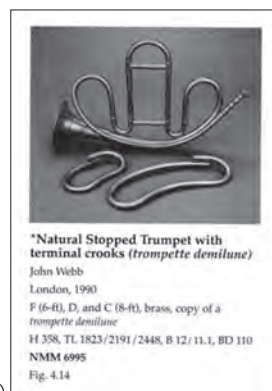
トランペットがこれ以上発展しないことを危惧した製作者たちは様々な形のトランペットを製作した。スライド・トランペット（図2）やストップド・トランペット（図3）がこれにあたる<sup>5</sup>。1794年にウィーンの宮廷音楽家アントン・ヴァイディンガーが発案したキートランペットも、そうした楽器の一つである。この楽器は今までトランペットが演奏できなかった半音階を演奏することができた。彼は自ら演奏することによってキートランペットを普及させようと、当時、宮廷楽長であったハイドンにキートランペットのための協奏曲を委嘱した。

さらに、ヴァイディンガーはアントニン・コジェルフ Leopold Anton Kozeluch (1747-1818) に《協奏交響曲（トランペット・ピアノ・マンドリン・コントラバスのための）変ホ長調》（1798年）を、またヨーゼフ・ヴァイグル Joseph Weigl (1766-1846) に《協奏曲変ホ長調》（1799年）を委嘱している。ハイドンの協奏曲は1800年に宮廷劇場で初演されているが、その時には大々的に告知をして、世間にキートランペットを紹介している。さらに1802年～1803年にはドイツ・フランス・イギリスでキートランペットを用いたコンサートツアーを行い、なかでもロンドンとライプツィヒで成功を収めたことを当時の新聞<sup>6</sup>から見る事ができる。ツアーによってキートランペットの普及に成功したヴァイディンガーは、ウィーンで人気のあったフンメルにも協奏曲を委嘱した。しかし、これ以降、キートランペットのための協奏曲が書かれることはなかった。

また、産業革命とともに、現在も使用されているヴァルヴ式の原型が開発され、それは音色の統一性においてキートランペットよりも優秀であった。このヴァルヴ式は一気に普及し、キートランペットは淘汰されていった。



(図2)



(図3)

## 2.2. 構造

キートランペットは自然倍音の第4倍音から第12音を基本としていることで、唇の筋力の緊張と弛緩が緩やかであり、その結果、唇への負担がかなり軽減されている。さらに音の出るベルの部分から半音ずつ上がるように、楽器には穴が開けられ、そこをキーで開閉することで半音階が可能

<sup>4</sup> 様々な理由として、非常に高度な演奏技術を必要とすること、貴族階級の衰退により、それまで権力の象徴となっていたトランペット奏者が少なくなっていたこと、音楽がより複雑になったことで、時代の要求に各調性の楽器を必要とするナチュラルトランペットでは対応できなくなっていたことなどが挙げられる。

<sup>5</sup> S.K.Klaus 2012 *Trumpets and Other High Brass Vol.2*, (California:National Music Museum, Inc. 2013), 249,256.

<sup>6</sup> *Leipziger Musikalische Zeitung*, 5 January 1803.

になっている。この仕組みは、今の木管楽器の構造である。

キーを取り付けたことにより、音の移り変わりがスムーズになり、速いフレーズも容易に演奏できるようになったが、穴の開閉により管の振動効率が変わり、音色が各音によってばらばらになってしまう問題<sup>7</sup>が起きた。

当時の演奏技法は、唇の振動をコントロールすることでのみ音を出していたので、常にタンギングとリップスラー、リップトリルを使用していた。さらにそこにフィンガリングが加わることで、ナチュラルトランペットでは不可能であった表現が可能になった<sup>8</sup>。

### 2.3. まとめ

キートランペットの歴史と構造の研究から、キートランペットは、ナチュラルトランペットを改良したものであり、その演奏技術の主はナチュラルトランペットにあり、そこにキーが加わったことで新たに出来る演奏表現が増えたことがわかった。

次に、当時の技法として特有であるリップトリルと、新たに演奏可能になったトレモロ、ターン、そしてそこから生じるテンポの問題に関して、フンメル作品をもとに考察する。

## 3. フンメルの協奏曲の考察

現在、出版されている楽譜の中には、現代のトランペットのために様々な改訂が加えられているものも多い。今回は、フンメルの自筆譜<sup>9</sup>をもとに考察を進める。フンメル自身が書いた自筆譜を選ぶことで、作曲者の意図を読み取ることができるからである。タールは自筆譜を詳細に分析し、校訂版<sup>10</sup>を出している。しかし、最終的には現代のトランペットで演奏することが目的である版のため、キートランペットを主としている筆者の研究とは方向性が違っている。ここでは筆者が実際に、キートランペットを使用して演奏をしたことから見出した新たな可能性を提示する。

### 3.1. 概要

フンメルの協奏曲<sup>11</sup>は1804年元旦に行われるエステルハージ家の晩餐会のために、1803年に作曲された。同年、フンメルはエステルハージ家の宮廷楽長の任に就いている。楽譜にはいたると

---

<sup>7</sup> Klaus, 2012.159.

ベル以外からも音が出てしまうため、音色に違いが生じる。

<sup>8</sup> Ibid, 162.

<sup>9</sup> Hummel 2011. Concerto a Tromba principale 1803 Autograph

<sup>10</sup> Tarr, Edward. Hummel Concerto a Tromba principale Einführung Historische Betrachtung Analyse Kritischer Kommentar Original-Solostimme

<sup>11</sup> 協奏曲が完成したのは、1803年12月8日。初演が1804年1月1日である。この曲を演奏するためにはキーを増やす必要があり、23日間で演奏できるようになることは困難であると推測されるため、前年のツアーの時にすでにプログラムに入っていたのではないかという F.Immer 氏の研究もある。《Quartett E-Dur (Klappentrompete, Violine, Violoncello, Klavier) oder auch als Trio (Klappentrompete, Violine, Klavier)》

ころに書き込みや書き直しがみられるため、初演したヴァイディンガーと相談しながら完成された可能性が高い。しかし、この曲を彼以外が演奏したという記録<sup>12</sup>はなく、普及することはなかったと考えられる。

この曲が再び演奏されるようになったのは、1958年にボストン交響楽団のアルマンド・ギターラが録音したことを始まりに、モーリス・アンドレなどの著名な演奏家が多く演奏したことによる。現在ではトランペット奏者の重要なレパートリーの一つとなっている。

しかし、今では普及している変口調のヴァルヴ式トランペットを用いて誰もが演奏しやすいように変ホ長調に書き換えた演奏がポピュラーであり、原曲のホ長調での演奏は大変稀である。このことは、コンクールなどの課題曲において、敷居を下げる目的<sup>13</sup>もあっただろう。しかし最近では、コンクールでも原調を重要視するようになってきている。それは、様々な調性のトランペットが製作され、原調でも演奏しやすくなったことによる。

しかし、その解釈はやはりヴァルヴ式トランペットによるものであり、キートランペット特有の音楽表現は失われていると考える。

### 3.2. リップトリル

リップトリルとは、指を使わずに口の動きのみで隣の倍音同士を高速に行き来させるナチュラルトランペットの演奏技術の一つである。ロワ Roy C.Eugène (ca.1790-1827) の書いたキートランペットのための教則本<sup>14</sup>にも書かれており、当時のトランペット奏者にとって重要な技術であった。

フンメル協奏曲の中にもトリルと表記されている場所が多く、なかでも第1楽章の297節目からの長いトリルは、キーを使った半音階の動きからクラリーノ奏法を彷彿とさせるリップトリルへと移行することで、演奏者の技術をみせるのに適している。また、倍音が近く、キーを使用するよりも演奏が容易である。

現代のトランペットでは音を確実に演奏できるようにフィンガリングを利用したトリルを使用するため、リップトリルを使用することはとても稀である。

<sup>12</sup> R.Dahlqvist 1975. The Keyed Trumpet and its greatest Virtuoso, Anton Weidinger, 17-20.

<sup>13</sup> 普及している変口調のトランペットでは、演奏技術的にホ長調よりも変ホ長調の方が演奏しやすい。また、ハイドンの協奏曲が変ホ長調であることも影響していると考えられる。

<sup>14</sup> 1824年に出版された教則本 *Méthode de Trompette sans clef et avec clefs - Schule für Naturtrompete und Klappentrompete* は、ナチュラルトランペット奏者がキートランペットを持ち替えて吹いていたことを示す資料で、当時のトランペット奏者の中でキートランペットが普及していたことを知ることが出来る。この教則本は全体を通してても39ページしかなく、その割合として、トランペットに関する序文が5ページ、ナチュラルトランペットの基礎練習が5ページ、ナチュラルトランペットによるデュエット、トリオ、カルテットなど8ページ、キートランペットに関する序文2ページ、キートランペットで行う基礎練習が3ページ、デュエット8ページ、キートランペットの為のソロ8ページと、教則本としてはとても短いことが特徴である。内容は、一番トランペット奏者から四番トランペット奏者が使用するマウスピースの大きさの違いを図で示したり、自然倍音、タンギング、キートランペットの運指表、半音階練習といったもので、詳しい説明は全く書かれていない。ほとんどがデュエットかソロの曲であり、まるで練習曲集かのようなものである。

図4 第1楽章 297小節



### 3.3. トレモロ奏法<sup>15</sup>の可能性

楽譜をととも丁寧を書く作曲家であるフンメルはこの協奏曲の中で、トリルの部分には tr と表記し、波線のみのも場所もあることから、トリルとその他の表現をはっきりとかき分けていると推測できる。これについて、現代の演奏は、すべてトリルの表記として演奏しているのがほとんどであるが、研究者の中には「トリルにはすべて表記がしてある。区別するためヴィブラートで演奏するべきである<sup>16</sup>」とする考え方もあり、はっきりしていない。

そこで筆者はキートランペットにしかできない演奏表現が含まれているのではないかと考える。それはトレモロ奏法である。もちろん、現在のヴァルヴ式トランペットにおいても、替え指を使用することによって限られた音はトレモロをすることができるが、キートランペットはすべての音で可能である。その理由はキートランペットの構造上、一つの音に対して、一つのキーを使用するように作られていることや、たとえ間違ったキーを押したとしても、音程に影響があまり見られないからである。

トレモロ奏法をすることにより、同じ音を伸ばしながら、ただ伸ばす音との区別をはっきりとつけることができる。しかし、これを裏付ける資料はまだ発見できていないため、推測の域を出ない。

図5 第2楽章 冒頭部分



図6 第3楽章 218小節目より



### 3.4. ターン

キーを付けたことにより指の動きだけで半音階が演奏できるようになった。そこで、フンメルは協奏曲の中にターンを頻繁に取り入れた。その結果、音楽表現の幅をさらに広げることができたと考える。

図7 第1楽章 126小節



### 3.5. 第3楽章におけるテンポ

この協奏曲の第3楽章で一番の問題となっているのはテンポである。表記には Rondo とだけ書かれていることから正確なテンポを知ることはできない。ここで筆者が提言したいのは、現在の演奏されるテンポでは速すぎるということである。ここには、トリル<sup>17</sup>とターン<sup>18</sup>が関与している。そのことに注目し、何が問題なのかを分析した。

#### 3.5.1. ソロパートにおける「トリル」と「ターン」

ソロパートにおける問題点は 194 小節目からのターンの表記である。

図8 第3楽章 194小節～

- ・現在の演奏と楽譜の考察



現在でも楽譜にはターンが印刷されているが、ほとんどトリルで演奏されている。それは、テンポが速すぎることにより演奏不可能だからである。そのために下の図のように簡略化されていると考える。しかしフンメルの自筆譜の第1, 2楽章にはトリルの表記もあることから、作曲家はターンとトリルをはっきりと区別しており、当時この箇所はターンで演奏していたことが明らかになる。

<sup>15</sup> Tremolo. 振動、ゆらぎの意。同音反復とバッテリーの2種類がある。

<sup>16</sup> E.Tarr, 2010, 17-18.

<sup>17</sup> 橋本英二。2011。28頁

<sup>18</sup> 同前。55頁

図9 現代の演奏を楽譜におこしたもの



では、当時はなぜこの箇所のターンを演奏することができたのだろうか。

### 3.5.2. 運指表を用いた方法

キートランペットは現在のトランペットと違い、全く異なる運指であるため、新たに調べる必要があった。そこで、ロワの書いた教則本を参考にした。

この教則本が重要視されているのは、現存する資料や楽器が非常に少ないキートランペットの運指表がイラスト付きで載っているからである。この時代は多種多様なトランペットが開発されていた過渡期であるため、イラストがついている運指表は、楽器を復元するうえで貴重な資料である。また、当時作られていた楽器の調性や形、キーの数と場所を把握することができる。復元されているキートランペットのほとんどがこの形を参考に作られている。



(図10 ロワの教則本より)

当時は様々な調の管が作られていたことから、今回はホ調の管のキートランペットとヴァルヴ式トランペットの運指を見比べてみる。

楽譜のターンのところを見てみると「ソラソ#ファソ」と演奏しなくてはならない。それぞれの運指を見てみると



### ヴァルヴ式トランペット

ソラソ#ファソ → 0 12(3) 0 2 0

### キートランペット

ソラソ#ファソ → 0 2 0 2 0

また、これを含め楽譜通り演奏するために、ヴァルヴ式トランペットは3つすべてのピストンを使用しなくてはならず、スピードには限界がある。その反対に、キートランペットは各音に対する1つのキーを押すだけで演奏することが可能であることがわかる。

明らかにキートランペットの方が簡単であり、ヴァルヴ式トランペットよりもテンポを速く設定して演奏することができることを示している。

### 3.5.3. オーケストラへの影響

では、どのようなテンポが良いのか、オーケストラから考えてみる。下の図は、現在の演奏テンポ設定が速すぎるために、もはやリズムを理解することは不可能な個所である。特に(図11)のフルート、ヴァイオリンに書かれている音型や、(図12)のヴァイオリン、ヴィオラに書かれている音型も現在では簡略化して演奏されることがある。この箇所が聴衆にも理解できるよう演奏されるべきであると考える。

図11 第3楽章 24小節～31小節

EE 6689

図 12 第3楽章 158小節～166小節

The image displays a musical score for a string ensemble, specifically measures 158 to 166 of the third movement. The score is arranged in two systems. The first system includes staves for Violin I (VI. I), Violin II (VI. II), Viola (Vla.), and Cello/Double Bass (Vc. e B.). The notation shows rhythmic patterns with eighth and sixteenth notes. Dynamic markings 'decresc.' are present in the upper staves. The second system continues the piece, with measures 167-174, featuring 'p' (piano) markings in the upper staves and a key signature change to two sharps at the end.

### 3.5.4. ケルビーニのオペラからの引用

当時、ケルビーニ Luigi Cherubini (1760 - 1842) のオペラはヨーロッパの各地で多く演奏される人気の演目であった。その作品の一つであるオペラ《二日間》(les deux journées)<sup>19</sup> は、フンメルがトランペット協奏曲を作曲していた 1803 年にウィーンにおいて頻繁に演奏されていた。

この第 2 幕フィナーレに書かれているフレーズと第 3 楽章 167 小節目から始まるオーケストラの楽譜がフレーズも調性も全く同じであるため、フンメル自身も聴衆への反響を意識して書いたと思われる。このことは、E. タールの著書<sup>20</sup>で指摘されている。

そこで筆者はテンポに着目した。もし、フンメルがこのケルビーニのオペラを引用したとすれば、現在の演奏テンポが速すぎるため、フンメルの意図したケルビーニのモチーフに聴衆が気づかない可能性がある。

<sup>19</sup> 《水の運搬人》(Der Wasserträger)とも言われている。1800年にパリにて作曲され、大成功を収めた。

<sup>20</sup> E.Tarr, 2010, 6-7.



以上の4点から、現在演奏されている3楽章のテンポが速すぎるために、損なわれている音楽表現があることが明らかになった。

#### 4. まとめ

フンメルのトランペット協奏曲において、ヴァルヴ式トランペットの開発と普及により、キートランペットのために書いた作曲者の意図の奏法とは違った、ヴァルヴ式用の変更が行われてきたことがわかる。そこではキートランペットはすでに淘汰されており、この曲が持つ本来の音楽表現は失われてしまっている。しかし、上で述べた通り、現代の演奏とは違った様々な表現をしていたことがわかった。

現在ではキートランペット自体が廃れてしまっており、当時の演奏を再現することは非常に困難であるが、近年ではバロック時代の楽器が復刻され、当時の演奏を目的とする演奏会も多々、開かれるようになった。この流れから、トランペットにとって重要な協奏曲であるフンメルの作品がキートランペットで演奏される機会も増えてくるだろう。しかし、キートランペットを当時の演奏習慣、演奏表現を無視して、現代の解釈で演奏しても、作曲家や演奏者が意図した表現とは全く異なるものになってしまうことは明らかである。

以上明らかになった諸点を踏まえ、オリジナル楽器に焦点を当てることで、この協奏曲の失われた本来の表現を取り戻せるであろう。本研究が現在のトランペット界に幾何かの貢献ができることを願っている。

---

参考文献

- Altenburg, Johann Ernst. 1993. *Versuch einer Anleitung zur heroisch-musikalischen Trompeter und Paukerkunst 1795* Leipzig: Friedrich Hofmeister Musikverlag.
- Dahlqvist, Reine. 1975. *The Keyed Trumpet and its greatest Virtuoso, Anton Weidinger* Vuarmarens: Editions Bim
- Heuberger, Richard. 1908. *Anton Weidinger Biographische Skizze*. Leipzig: Schuster & Loeffler.
- Herbert, Trevor Wallace, John. 1997. *Brass Instruments Cambridge*: University Press
- Klaus, Katharina, Sabine. 2012 *Trumpets and other High Brass Volume 1.2*. California: National Music Museum, Inc.
- Lindner, Andreas. 1999. *Die Kaiserlichen Hoftrompeter und Hofpauker im 18. und 19. Jahrhundert*. Tutzing: Hans Schneider  
———1993. *Anton Weidinger*. (Diploma thesis) Vienna, Fil. Faculty of Vienna University
- Ottner, Hermut. 1977. *Der Wiener Instrumentenbau 1815-1833*. Tutzing: Hans Schneider
- Rouček, Jaroslav. 2012. *Chromaticism of brass musical instruments in the first half of the 19th century – instruments fitted with a key mechanism* Prague
- Roy, C. Eugène. 2009. *Méthode de Trompette sans clef et avec clefs - Schule für Naturtrompete und Klappentrompete Facsimile 1824* Vuarmarens: Editions Bim
- M. J. Rouček 2012 「Chromaticism of brass musical instruments in the first half of the 19th century – instruments fitted with a key mechanism」 PhD. diss. Přidělovaný akademický
- Tarr, Edward. 2010. *Hummel Concerto a Tromba principale Einführung Historische Betrachtung Analyse Kritischer Kommentar Original-Solostimme* Vuarmarens: Editions Bim
- 橋本英二 2011 バロックから初期古典派までの音楽の奏法 東京：音楽之友社

参考楽譜

- Cherubini Luigi. 2004. « *Der Wasserträger* » *Lyrische Komödie in drei Akten München*: Musikproduktion Höflich
- Hummel Johann Nepomuk.  
———2011. *Concerto a Tromba principale 1803 Autograph* Vuarmarens: Editions Bim  
———1979. *Trumpet Concerto E-major* London: Ernst Eulenburg Ltd.  
———1972. *Trompetekonzert Ausgabe für Trompete in E und Klavier* Mainz: Universal Edition G.m.b.H.  
———*Quartett E-Dur (Klappentrompete, Violine, Violoncello, Klavier) oder auch als Trio (Klappentrompete, Violine, Klavier)* Nagold: Martin Schmid Blechbläsernoten